9　デイケアが高齢者に及ぼす影響

－地域におけるミニデイケア参加者の変化を測定する用具の開発－

時　長　美　希　26回生　高知女子大学
森　下　安　子　26回生　高知市保健センター
宮　上　多加子　26回生　高知女子大学保育短期大学部
○村　上　和　子　23回生　高知市長寿生活課
井　上　　郁　22回生　高知女子大学

1．はじめに

現在、地域においては、主に機能障害を持った高齢者を対象として、デイケアあるいはデイサービスと呼ばれている活動が行われている。最近では、デイケアの効果を測定しようとする試みも報告されており、リハビリテーションや精神科看護の領域において、ＡＤＬ，ＩＡＤＬ、神経行動機能、社会的行動、意欲等の変化に焦点を当てて参加者の変化を測定した結果[1)～4)]では、それらの機能はデイケア参加により、いずれも維持・改善傾向を示している。しかし、地域看護や老人看護の領域においては、デイケアの効果を分析した研究は少なく、参加者自身の主観的評価に関する研究では、デイケアに参加しての思いや感想のまとめが中心で、高齢者自身の認知を測定したような研究は報告されていない。[5)～8)]

高知市では平成５年度より、いわゆる「閉じこもり予防」を目的として、ミニデイケアと呼ばれる試みが保健婦によって始められ、その効果も予測されている。今後このミニデイケアの内容についてより効果的な方法を検討し、重要な地域サービスの一つとして位置づけていくためには、参加者の変化を多面的に測定し、その効果を評価していく必要がある。その評価方法として、既存の研究で報告されているような他覚的評価とともに、参加者自身による主観的評価を行うことが重要であると考え、そのための測定用具を開発することを目的に研究を行う事とした。今回の研究により開発された測定用具を使用して、参加者自身の視点によるデイケアの評価を行うことにより、地域サービスの充実や質の向上のための貴重な資料となり、また地域サービスの中で看護者が提供しているケアの質を評価していくためにも、重要な情報を得られると考える。

2．理論的背景

1）文献の検討

デイケア参加者の変化を他覚的に評価する測定用具としては、ＡＤＬが広く受け入れられている。ＡＤＬの評価は、老人の総合的機能評価の一部として、また治療計画や治療的介入の効果判定等の指標として利用されている。一方、老人のケアにおいては、その個人の生活の場を重視し、地域社会における生活活動の維持を重要な目標としており、そのために必要とされる能力として、手段的活動や動作（ＩＡＤＬ）の評価が取り上げられている。

さらにこれらを含めた老人の機能評価を総合的に行うために、身体的ＡＤＬ、身体的情報機能、社会生活から構成されるスケールが作成され、信頼性、妥当性が検討されている。[9)～13)]

老人自身の認知の測定としては、主観的幸福感、活動、社会的ネットワークについて調査し、相互の関連や

影響要因を分析した研究がみられる。[14)~18)]

2）概念枠組み

看護、医療、保健、福祉領域の雑誌および図書６７種類から、地域のグループ活動の報告や研究について「グループ活動」「グループ」「セルフヘルプグループ」「グループワーク」「組織活動」「デイケア」「機能訓練」「リハビリテーション」「交流」「仲間づくり」「地域づくり」をキーワードとして、過去５年間について検索し、得られた２７１の文献から、グループの目的や効果及び、参加者の変化、参加者が期待しているもの1514項目について分析し、＜グループ活動の特性＞に関する４つの概念、参加者への＜直接的に影響するもの＞１４の概念、＜二次的に影響するもの＞５つの概念を抽出し、それをもとにして、概念枠組みを作成した。

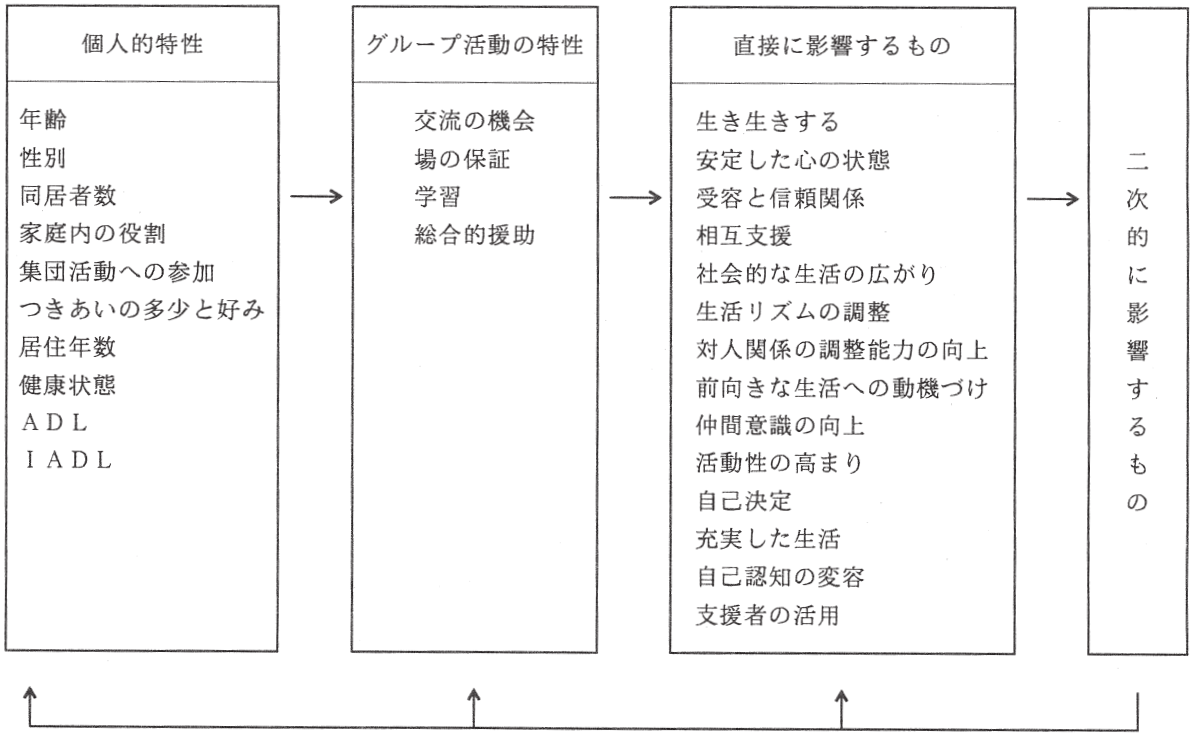

図１　本研究の概念枠組

3）仮説

本研究の概念枠組みは、＜個人的特性＞が＜グループ活動の特性＞に関係し、＜グループ活動の特性＞が＜直接的に影響するもの＞に関係し、＜直接的に影響するもの＞が＜二次的に影響するもの＞に関係することを表している。この概念枠組みを基に、仮説を立てた。

(1)[交流の機会]は、[安定した心の状態][受容と信頼関係][相互支援][社会的な生活の広がり][対人関係の調整能力の向上][仲間意識の向上][活動性の高まり]に関係する。

(2)[場の保証]は、[生き生きする][安定した心の状態][生活リズムの調整][充実した生活]に関係する。

(3)[学習]は、[前向きな生活への動機づけ][自己決定][自己認知の変容]に関係する。

(4)[総合的援助]は、[支援者の活用]に関係する。

3．研究目的

地域で実施されているデイケアが高齢者に及ぼす影響を明らかにするために、参加者が個々の体験に基づいて、グループの特性や自分自身の変化について主観的に評価する測定用具を開発することを目的とし、以下のことを目標に今回の研究を行った。

1）質問紙を作成する。

2）質問紙の信頼性と妥当性の検討を行う。

4．研究方法

1）対象者

高知市内5か所において1996年5月に実施されたミニデイケアの参加者であり、自分で質問紙に回答できる人の中で、参加に同意が得られた人を対象者とした。

2）質問紙の作成

概念枠組みを基に主要概念について定義されたそれぞれの概念を測定するための質問項目を作成した。質問項目は「全くそう思わない」0点から「非常にそう思う」4点の5段階評価とした。内容の妥当性を検討するために、ディスカッションを繰り返し、概念名・定義・項目の整合性を吟味し、その結果を基に、最終的に17ページ 215項目の質問紙を作成した。その内容は＜個人的特性＞に関するもの8カテゴリー41項目、保健婦による客観的データとして対象者のＡＤＬ、ＩＡＤＬ17項目、＜グループ活動の特性＞に関するもの、4カテゴリー、計50項目、＜直接的に影響するもの＞14カテゴリー 、計107項目である。

表1　主要概念の定義

グループ活動の特性

概　　念	定　　義
交流の機会	交流とは、言語的・非言語的コミュニケーションにより人と出会い、関わることである。その関わりの中で仲間ができ、対人関係や関心が質的にも量的にも広がっていく。
場の保障	対象者にとって、価値があり安心できる空間と時間と心理的な「居場所」が保障されていること。
学　　習	専門家やあるいは同じ立場の人から対象者が必要とする情報や知識を獲得し、対象者の生活に生かす方向性を見いだすこと。
総合的援助	対象者や家族が保健・医療・介護・福祉等の専門家から総合的な援助を受けられること。

表2　概念の定義

直的的に影響するもの

概　念	定　　義
受容と信頼関係	自分をわかってくれ、受け入れてくれる仲間であると感じられ、お互いを信頼し合える関係
相互支援	参加者同志が、お互いに励まし合ったり、種々の支援を行なうこと
社会的な生活の広がり	グループ活動に参加することによる物理的行動範囲の拡大と、他の人との交流や社会活動の増加、自分の日常生活の保持、周囲への関心の高まりなど社会生活の量的・質的広がりである
対人関係の調整能力の向上	グループメンバーと関わることによって、新たな対人関係を体験し、心配りや協調性を養ったり、対人関係の調整能力を高めること
仲間意識の向上	グループメンバーと共に活動することにより、グループの一員としての意識が高まり、メンバーとの結びつきやグループへの所属感が強化されること
活動性の高まり	会に参加することで、積極的な姿勢や生活に活力がみられ、意欲が向上すること
安定した心の状態	グループ活動に参加することを通して、心の支えを得たり不安や孤独感が解消されたり、またストレス解消や気分転換につながり精神的に穏やかな状態になること
生き生きする	グループ活動への参加を楽しいと感じたり、その場で自分の体験・思い・感情を表現するようになり、表情や気分が明るく豊かになること
生活リズムの調整	単調な生活から抜けだし、自分なりに毎日の生活リズムを整えること
充実した生活	日常生活の中で、自分の存在が認められ、気持ちの余裕や自信、満足感を持って生活をすること
前向きな生活への動機づけ	グループ活動に参加し、仲間と交流したり学ぶことにより、自分の生活や生き方を見直すきっかけを得ること
自己決定	自分で考えを判断し、決定し、行動できるようになること
自己認知の変容	自分の生活を振り返り、自分自身を客観的に見ることができるようになることで、障害を受けとめ、前向きに生活していくようになること
支援者の活用	グループメンバーが主体的に医療サービスやその他の社会サービス、専門職からの援助を活用すること

3）データ収集

ミニデイケアを実施している地域担当の保健婦より対象者に、デイケア当日、研究目的とともに、自由参加・無記名であることを説明したうえで、協力の得られた人に質問紙を配付し、その場で記入してもらい回収した。研究への参加同意書は、特に準備せず、質問紙への回答をもって同意が得られたものと判断した。

4）分析方法

主要概念毎にスケールを作成し、スケールの記述統計と内的一貫性、及びスケール間の相関関係について分析した。

5．結果及び考察

1）対象者の背景

研究への参加が得られた４８名のうち、　質問紙の７５％以上回答している３９名を有効回答として今回の分析に使用した。女性がほとんどを占め、７０才以上が約６０％であった。本人以外の同居者の平均は２名で、約３分の１が一人暮らしであった。その地域での居住年数の平均は、２８年であった。また、ほとんどのものが、一人でいるよりも知人・友人と多くつき合う方が好きだと答え、８割の者が家庭内で決まった役目を持ち、約３分の１は他の地域活動に参加していた。

2）スケールの信頼性

この質問紙に含まれている＜グループ活動の特性＞及び＜参加者への直接的な影響＞に関する概念を測定する１８のスケールのうち、１６スケールのCronbachのα信頼性係数は、0.80以上であり、充分な信頼性があると考えられた。

α信頼性係数が0.60以下であった２つのスケールは、[総合的援助]と[支援者の活用]であった。[総合的援助]は、グループ活動の特性の一つとして、対象者や家族が保健・医療・介護・福祉などの専門家から総合的な援助を受けられることで、２つの項目から成るスケールである。この２項目の間に有意な相関はみられず、多様な職種の援助者が一緒にいることと、それらの援助者から援助を受けることは、別々のことであると考えられた。参加者にとって、デイケアの場に様々な援助者が一緒にいることは、具体的な援助を得られることに

表３　各スケールの Cronbach's α信頼性係数

概　念　名	標本数	Cronbach's α
交流の機会	39	0.957
場の保障	39	0.950
学習	39	0.941
総合的援助	39	0.160
受容と信頼関係	39	0.883
相互支援	39	0.851
社会的な生活の広がり	38	0.959
対人関係の調整能力の向上	38	0.927
仲間意識の向上	39	0.960
活動性の高まり	39	0.927
安定した心の状態	38	0.979
生き生きする	39	0.933
生活リズムの調整	37	0.899
充実した生活	39	0.934
前向きな生活への動機付け	39	0.802
自己決定	39	0.875
自己認知の変容	39	0.925
支援者の活用	38	0.503

つながるというよりも、援助者の存在そのものから安心感が得られることのほうが強いのかもしれない。我々は、＜グループ活動の特性＞に関する概念として[総合的援助]は重要なものであり、除くことはできないが、援助者が一緒にいることの援助的な意味や、多様な職種から受ける総合的な援助内容については吟味が必要で、質問項目についても、再検討する必要があると考えている。

[支援者の活用]はグループメンバーが、主体的に医療サービスやその他の社会サービス、専門職からの援助を活用することであり、デイケアの場で、参加者が自分から多様な援助者に相談することとデイケア以外にも自分の必要性に応じて、援助の問い合わせをすることを含む２項目からなるスケールである。このスケールのCronbachα信頼係数は、0.503と低かったが、項目数が２項目と少ないことを考えると、今後、項目の内容と共に、新たな項目の作成も含めて検討する必要があると考えている。

３）主要概念間の相関関係

仮説を基にして、各概念間の相関関係を検討した。

表４　グループ活動の特性と直接的に影響するものの相関関係

概　念　名	交流の機会	場の保証	学　習	総合的援助
受容と信頼関係	0.778**	0.445**	0.789**	0.471**
相互支援	0.693**	0.362*	0.760**	0.412**
対人関係の調整能力の向上	0.452**	0.302	0.407*	0.218
社会的な生活の広がり	0.513**	0.209	0.485**	0.316
仲間意識の向上	0.520**	0.299	0.497**	0.195
活動性の高まり	0.473**	0.265	0.439**	0.177
安定した心の状態	0.863**	0.554**	0.800**	0.572**
生き生きする	0.846**	0.634**	0.687**	0.450**
生活リズムの調整	0.620**	0.256	0.670**	0.340*
充実した生活	0.462**	0.325*	0.491**	0.334*
前向きな生活への動機付け	0.767**	0.418**	0.841**	0.519**
自己認知の変容	0.540**	0.323*	0.566**	0.240
自己決定	0.281	0.066	0.373*	0.187
支援者の活用	0.312	0.081	0.408*	0.209

**p<0.01　　*p<0.05

(1) [交流の機会]は、[安定した心の状態][受容と信頼関係][相互支援][対人関係の調整能力の向上][社会的な生活の広がり][仲間意識の向上][活動性の高まり]と有意な相関が見られた。このことから、デイケアの中で、参加者が交流することにより、お互いを受容し、信頼関係を築き、仲間意識や対人関係の調整能力が高まり、そのような関係の中で、心が安定し、社会的な生活が広がり、活動性が高まり、相互に助け合う関係に発展していくと考えられる。

さらに、[交流の機会]は、[自己決定][支援者の活用]を除いた他の全ての概念と有為な相関がみられた。デイケアの中で、参加者同士がお互いに関わりあうことは、対人関係の質や量に関係するだけでなく、自己認知、心の状態、生活の仕方とも関係する重要な要素であると考えられる。

また、参加者同志の交流の仕方は多様で、広がりを持ち、様々な方向への発展性を持ったものである。一方、その関係は、動的であるために、不安定になりやすい。従って、看護者は、グループの中で、交流しあうメンバーの一人であると共に、それが参加者にとって、可能性を広げるものとなるように参加者同志の交

流を質、量ともに増やしたり、広げたり、継続するというように支えるていくことが必要である。

(2) [場の保障]は、[生き生きする][充実した生活][安定した心の状態]について、有意な相関がみられた。しかし、[生活リズムの調整]については、有意な相関がみられなかった。デイケアという安心できる居場所が保障されれば、外出の機会となり、昼間外出することで睡眠状態がよくなり生活にメリハリができて、単調な生活ではなく、毎日の生活リズムが整えられると考えた。しかし、今回対象としたミニデイケアは、その実施が月1回と頻度が少ないため、生活リズムの調整に影響するまでには到っていないと考えられる。今後は、より実施頻度の高い場所に通っている者を対象として調査し、再検討する必要がある。また、質問項目の特徴としては、定期的に行く場というよりも心理的な要素の強い項目が多く、そのことが関係しているとも考えられるので、質問項目についても再検討する必要がある。

(3) [学習]は、[前向きな生活への動機付け][自己認知の変容][自己決定]と有意な相関が見られた。このことから、デイケアの中で学習することにより、自分の生活や生き方を見つめ直し、それらを自分のこととして受けとめるとともに、新しい自分を発見したり、前向きな生活へのきっかけを得ることができ、また、学習することを通して、自分で判断し、決定し、行動するようになると考えられる。さらに、[学習]は<直接的に影響するもの>に含まれる全ての概念と有意な相関がみられた。これは、[学習]が、ひとつは、必要とする情報や知識を獲得し、自分の生活に活かす方向性を見いだすという個人の成長への要素と、お互いに学び合うという参加者同士の交流と捉えられる要素との2つを含むため、[交流の機会]と関係のある概念とも相関を持つこととなったと考えられる。

また、[場の保証]と関係すると考えていた概念との間にも有意な相関がみられたが、[学習]は、前述したような2つの要素を持つことを考え合わせると、[生き生きする][生活リズムの調整][充実した生活]と関係すると考えられる。とくに、[生活リズムの調整]は、[場の保証]とのあいだに有意な相関がみられなかったものであるが、デイケアという場を定期的に保証することで、生活リズムを調整することにつながると考えるだけでなく、必要な情報や知識を獲得し、生活に活かす方向性を自分自身で見いだすことによって、生活リズムを調整することができるようになると考える必要があるのではないだろうか。つまり、場を保証するという環境への働きかけとともに、参加者自身の調整能力を育てることを含めて援助の方向を考える必要があるだろう。

<グループ活動の特性>のなかで、[学習]のみが[支援者の活用]と有意な相関があった。参加者は、学習することによって、主体的に医療サービスやその他の社会サービス、専門職からの援助を活用できるようになると考えられる。仮説では、グループ活動の特性として[総合的援助]が、そこにあることが[支援者の活用]につながると考えていたが、それだけではなく、学習することによって、参加者自身が援助を活用する力を得ることと関係していることが示唆された。このように、[学習]は、グループ活動において、参加者の様々な側面に直接的に影響する重要な特性を持つものであり、看護者は、参加者の学習が促進され、深まるように、学習の持つ2つの要素を支えていかなければならないと考える。

(4) [総合的援助]と[支援者の活用]との間には有意な相関はみられなかった。このことから、援助者がいることと、自分から主体的に専門家の援助を活用することとは別のことだと考えられる。また、デイケアにかかわっているのは、多くの場所では保健婦・在宅介護支援センターの職員・民生委員などが中心であり、現状では参加者のニーズに合わせて、理学療法士等の専門家の協力を得るシステムはとられていないため、総合

的な援助となっていないとも考えられる。[総合的援助]については、概念や質問項目について、再検討するとともに、専門職の協力体制を整えて、再調査する必要がある。

一方、[総合的援助]は[場の保障]の中に含まれる[生き生きする][安定した心の状態][生活リズムの調整][充実した生活]という4つの概念と有意な相関がみられた。デイケア参加者にとっては、その場に行って、自分達だけではなく専門家がいることや、専門家からさまざまな援助が受けられることで、自分の体験や・思い・感情を表現するようになり、精神的に穏やかな状態になると考えられる。

また、[総合的援助]は[受容と信頼関係][相互支援]と有意な相関がみられた。デイケアが始まって1年という短い期間の場所があり、参加者同士が、お互いに信頼しあい励ましあえるように援助者がかかわっている段階であることが関係しているのかもしれない。今後、追跡調査を続けていくことで、検討していく必要がある。

(5) ＜グループ活動の特性＞と＜個人的特性＞の間には相関はみられなかった。また、＜直接的に影響するもの＞と＜個人的特性＞の中の性・年齢・居住年数・同居者数・家庭内での役割の有無との間にも相関はみられなかった。＜直接的に影響するもの＞の中の[社会的な生活の広がり][活動性の高まり][自己決定]と有意な相関が見られたのは、友人・知人とのつき合いが好きかどうかという項目と他の地域活動への参加の有無の2項目であった。このことは、その人達の生きていくことの積極性の表れであると考えられ、積極的に生きるために、社会的な生活の広がりや活動性を高めていく地域全体の活動を活発にし、他にも参加できる環境を設定し、地域の活性化を促すことが、地域の看護者の役割として、重要であることが示唆された。

6．おわりに

今回開発した、参加者の主観的変化を測定する質問紙は、充分な信頼性があると考えられたが、総合的援助・支援者の活用の項目について、検討が必要であると考えられた。ミニデイケアは、参加者の主観的評価からみると、交流の機会、学習における看護展開が大きな意味があるといえる。

今回の調査は試験的に実施したものであり、調査数も少なく、充分な質問紙の検討には至っていない。また、概念間の相関のみ成らず、各サブカテゴリー、各項目間同士の相関をみる必要がある。

今後は、今回開発した質問紙の検討と共に、二次的に影響するものの測定用具の開発を行い、調査数を増やすことにより、質問紙の信頼性と妥当性を高めていく必要があると考えられる。

引用・参考文献

1) 越野まゆみ他：障害を持つ高齢者におけるデイケアの有効性と課題，日本看護協会　第22回老人看護，　1991.

2) 末田明美他：参加者の行動変容からみた保健所デイケアの目的達成度とスタッフの役割，日本看護協会 第21回地域看護，1990.

3) 近藤重昭他：我々のデイケア評価の試み，精神医学，34(11)，p.1177-1187，1992.

4) 奈良勲他：デイケアにおける高齢者の心身機能低下の予防，PTジャーナル，28(6)，1994.

5) 中嶋冨士子他：脳血管障害患者のレクリエーションによる意欲の変化，日本看護協会　第21回老人看護，　1990.

6) 澤田信子他：民間病院における「老人デイケア」の効果と課題－ＣＡＴ社会的行動調査・面接・アンケート調査による－，日本看護協会　第23回老人看護，1992.

7）諸伏悦子他：生活評価表にもとづいた老人デイ・ケアの有効性の検討，日本看護協会　第24回地域看護，1993.
8）澤田信子他：民間病院における「老人デイケア」の効果と課題－ＣＡＴ社会的行動調査・文集・家族会からの分析－，日本看護協会　第24回老人看護，1993.
9）古谷野亘：地域老人における手段的ＡＤＬ－社会的生活機能の障害およびそれと関連する要因－社会老年学，33，p.56-67
10）小澤利男：老人科外来における機能評価，Geriatric Medicine，32(6)，p.699-701，1994-6.
11）大橋靖雄他：機能評価法の信頼度と有用性，Geriatric Medicine，32(5)，p.567-575，1994-5.
12）江藤文夫：老年者のＡＤＬ，ＩＡＤＬの評価法，Geriatric Medicine，32(5)，p.519-524，1994-5.
13）竹内孝仁：老年者のリハビリテーションにおける機能評価，Geriatric Medicine，32(6)，p.693-696，1994-6.
14）前田尚子：老年期の友人関係－別居子関係との比較検討－社会老年学，28，p.58-70
15）古谷野亘他：都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関する要因，老年社会科学，16(2)，p.115-123，1995.
16）玉野和志他：日本の高齢者の社会的ネットワークについて，社会老年学，30，p.27-36，
17）横山博子：主観的幸福感の多次元性と活動関係について，社会老年学，26，p.76-91，
18）西下彰俊：高齢女性の社会的ネットワーク－友人ネットワークを中心に－社会老年学，26，p.43-53，